

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

中国陶磁窯址の考古学的研究

An Archaeological Study of Chinese Ceramics

Kiln Sites

2018年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

関口 広次

SEKIGUCHI, Hirotsugu

中国陶磁窯址の考古学的研究

概要書

関口広次

中国では日本で言う磁器の語を「瓷器」と表現し、また「陶器」と言った場合には土器、陶器、低火度釉の緑釉陶器や三彩等を含んだ総称として使われる。中国は世界的にも磁器生産の開始が早かった国で、またその後の発展も著しく、欧米では磁器を国名である「チャイナ」と称していることから、その影響度の大きさが知れよう。中国陶磁を体系的に見ると土器、陶俑、緑釉・三彩、青磁、白磁、黒釉(天目)、鉄絵、青花(染付)、上絵等にジャンル別け出来る。この体系化は、戦前からの日本の伝統的な中国陶磁史研究で確立されてきた。ただ従来の中国陶磁研究では美術史的観点からのアプローチが大勢を占め、陶磁器自体の研究が中心となり、それを支えた生産史への総括的研究は乏しい。これらの陶磁器の生産は窯を使用して焼かれたものである。窯は陶磁器生産の主要設備であり、また窯に製品を詰めたり、載せたりする一括して「窯道具」と称される道具類が付随する。中国窯業技術史に関して、熊海堂『東亜窯業技術発展与交流史研究』(南京大学出版社 1995年)があるが、これは生産された陶磁器と窯址の関係を考察する視点が欠落していた。

土器窯から始まり、青磁を焼いた窯、青花を焼いた窯へと構造変化を加え発展して行くが、その発展過程は単純に直線的な発展を示すものではない。上記ジャンルの中で絡み合い、また地域差、特に中国の南北間、すなわち華北・華南地域での窯構造の違いが、製品の特色となって現れてくる。無論、材料である粘土・カオリンの地域ごとでの性質差や燃料の薪から石炭の使用への転換等が窯構造に、逆に影響を与えてもいる。

本論文では生産された中国陶磁器と窯址の関係に留意しながら、中国陶磁窯址の変遷と系譜を論じたものである。考古学の発掘調査で報告された上記ジャンルを代表する窯址について取り上げ、窯構造について考古学的に考察を加え、時には窯道具を中心に検討を加えて行く。そうした作業を通して、今まで欠如していた中国陶磁器とその生産窯址の歴史を体系的に明らかにして行く。窯とは「炎を最大限高温に保持する空間の施設」であり、どの様にして発生し、改良発展したのかに眼を向ける必要がある。特に土器から磁器への変化には、材料が高温に耐え得る素材となること、そして炎を 1200℃以上の高温に保持出来る窯である必要がある。窯の天井を常設のしっかりした構造にすることへの技術革新から窯としての発展開始があった。こうした視点を基本に論を展開して行く。

具体的には、窯は先ず稲藁や粘土でパッキングする「覆い焼き」から始まり、焼成時に天井を臨時に覆う、いわゆる「天井のない窯」へと進化発展の過程を経る(序論「天井のない窯の話」参照)。新石器時代の土器である紅陶や灰陶類は「天井のない窯」で焼成された(本論

第一章「中国新石器時代の窯」参照)。夏・商代に華南地域で「泥釉黒陶」から高温度釉薬を發明し「原始瓷器」と呼ばれる磁器生産を世界で最も早く始めた(本論第二章「原始青磁と青磁」及び第十六章「中国陶磁と日本中世陶器—壺・甕類における相違点を中心に—」等参照)。浙江省地域で越州窯・龍泉窯そして南宋官窯といった過程を経て青磁を完成させた。それらの窯構造は龍窯の発展の歴史(本論第三章「龍窯について」参照)でもあり、青磁のほかに福建省を中心に天目茶碗を代表とする鉄釉製品の生産をも行なっている(本論第十四章「『天目茶碗』を焼成した窯」及び第十五章「南宋都城址杭州に流通した天目茶碗—米内山庸夫資料を中心に—」等参照)。

華北では南北朝期に青磁から白磁を誕生させた。そこでは新石器時代の土器窯から饅頭窯への発展の歴史でもあった(第十章「白磁の発生をめぐって」参照)。南方を中心に発展した龍窯と北方を中心に発展してきた饅頭窯が元代に景德鎮で融合した形で葫芦形窯あるいは近現代の鎮式窯を生み出した(本論第十七章「景德鎮の青花窯」参照)。同時に景德鎮ではカオリンの使用が始まり陶石(パイトンツ)とブレンドした二元配合法が宋代に考案され成型、焼成時の大いなる改善が達成出来た。こうした中、元代後期には青花を誕生させた(本論第十八章「近年の景德鎮における元青花研究から」参照)。こうした高温度製品とともに低火度釉の発展は漢代(本論第九章「カシュガルの土器造り」参照)そして唐三彩へと継承される(本論第八章「唐三彩の窯について」参照)。さらに宋・金代に北方で既に開発されていた上絵付け技法を青花と合体させ、明代には今日に繋がる色彩豊かな色絵を完成させた。清朝期の色絵窯は上絵専用の低火度窯で、内窯と外窯からなる二重構造で、すき間に木炭を燃料として入れる。その技術は江戸時代に中国から日本にも伝来していた(本論第十九章「明・清時代の上絵窯」参照)。

中国出土・採集陶磁器片では、外国の資料ということもあり、必ずしも自由に扱える遺物ではないが、小山富士夫の定窯採集片(本論第二章「定窯の覆焼技法について」参照)、そして米内山庸夫採集の南宋官窯の窯道具や陶磁器片の整理(本論第四章「米内山庸夫採集南宋郊壇下官窯址の窯道具類の整理報告」及び第十五章「南宋都城址杭州に流通した天目茶碗—米内山庸夫資料を中心に—」等参照)の機会を得た。これらの資料は戦前に日本に将来された貴重な陶磁片であったが、筆者が整理するまで眠ったままの状態であった。定窯採集片の整理からは、定窯の白磁は銀器の模倣を指向し、均一な薄造りの器形に限りなく近づけようとして、考案された窯詰め技法が覆焼技法であり、同一規格の製品を大量に生産出来る窯詰め方法であったことを指摘した。南宋官窯の窯道具の研究からは、底部まで全面施釉された上手の製品の窯詰め時に使用された磁器質の円錐ピンの支焼具が開発されたことを指摘した。また日本出土の明代中期の中国貿易陶磁について、特に沖縄県石垣市シタダル海底遺跡資料の整理作業と研究考察(本論第五章「沖縄県石垣市名蔵シタダル海底遺跡採集<顧氏>銘青磁碗考」、第六章「浙江省慶元県竹口後窯窯址及び新窯窯址の明代青磁について」及び第十三章「福建省邵武市四都窯址について—割高台白磁小皿の生産窯址—」等参照)も行なう機会を得た。そうした調査成果を踏まえて、まとめあげた二十篇の論文を掲載した。